

N 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずにきれいに取り除いてください。

マーク例

①	
0	1
0	2
●	3
0	4
0	5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

ソクラテスの弟子がプラトンで、プラトンのそのまた弟子がアリストテレスです。そして、アリストテレスより少し遅れてギリシア世界に現われたのが、ストア学派とエピクロス学派の連中です。ふつう、このストア学派の道徳を克己主義、あるいは禁欲主義と呼び、エピクロスの道徳を快樂主義と呼びます。

つぎに、禁欲主義と快樂主義との関係について説明しましょう。ちよつとみると、この二つは正反対のようですが、似ている点もおおいにあるので、そこがむずかしい。

こんな話があります。あるとき、エピクロス学派の連中とストア学派の連中とが、アテネの町の広場に集まって、喧々囂々けんけんしょうしょう議論をしておりました。エピクロスの弟子たちは「人生の目的は□□だ。」と主張します。いっぽう、ストア学派の連中は「□□を遠ざけ、宿命を受け入れよ。」と主張します。これではまるで喧嘩けんかのようで、いつまでたつてもらちがあかない。すると、そこへエピクロス学派の親分であるエピクロスと、ストア学派の親分であるゼノンとが悠然と現われました。いよいよ親分同士の対決となったわけです。

弟子たちは、どんな激しい議論がおっぱじまるかと、固唾かたすをのんで見守っておりました。ところが、二人はお互いに意見を交換し、しばらく哲学的な会話をつづけたかと思うと、たちまち意気投合し、にこやかに笑いながら、肩をたたき合うほどの打ちとけた仲になってしまったのです。⁽¹⁾弟子たちはあっけにとられました。これはいったい、どうしたことなのだろう？

しかし、この親分同士の意見の一致は、じつは、ふしぎでもなんでもなかったのです。ちよつと見たところ、正反対のように思われる禁欲主義と快樂主義とは、その奥深い面で、互いに相通じる部分があつたわけなのです。では、その相通じる部分とは、何か。一口に言えば、エピクロス哲学もストア哲学も、自然と一致して、生きることをモットーにしていたのです。自然と調和して生き、なにものにもわずらわされない平静な心へいせいの状態、すなわち、アタラクシアに達することを求めていたのです。

この二つの哲学は、根本において共通の目的、死の脅威や時間の脅威から人間を解放することを追求していた、⁽²⁾ といつてもよいでしょう。師の哲学の上つらただけを生嚙りしていた弟子たちとは違つて、両派の巨頭であるエピクロスとゼノンとが、ひとたび意見を交換するや、おおいに意気投合したというのも、道理であつたわけですから、むろん、同じ目的を追求するといつても、エピクロス派とストア派とでは、その目的を実現するための手続きに、大きな違いがあります。つぎに、その違いについて説明しましょう。

簡単にいつてしまえば、ストア哲学にとつて、「自然と一致する。」⁽³⁾とは、外界に対する一種の緊張を意味し、エピクロス哲学にとつては、一種の緊張緩和（リラックス）を意味します。

たとえば、道を歩いていて嵐にぶつかつたと仮定する。その場合、ストア派の人間なら、できるだけ苦痛の感情から身を離し、「雨や風は、おれとは無関係だ。おれは大地に足を踏みしめて、がっちり立っているのだから、いくら雨が降つても風が吹いても平気だぞ。」と考えます。つまり、これが緊張です。

いっぽう、エピクロス派の人間は、襲いかかってくる外界の攻撃に敢然と耐えようなどとは、最初から考えません。彼はたぶん、こう考えるでしょう。「風がくるなら、まあ、それもよかるう。」と。そして、「やれやれ、ずぶ濡れになつちまつた。だが、まあいいや、ほうつておけば、そのうち着物もかわくだらうさ。」つまり、これが緊張緩和です。

緊張を緩和する（リラックスする）ということとは、動物的な状態に身をおくということですが、暑い夏には、イヌは舌を出してぐったり寝そべります。雪の降る寒い日には、喜んで飛びはねます。夏のあいだ、植物が日なたではしおれ、日かげではいきいきとして起きなおると同じです。

つまり、その時その時の周囲の状態によつて、いろんなふうに生き方を変え、もつとも楽な姿勢を選ぶというわけです。外から何が襲つてきても、これに対抗してがんばろうなどと、むだな努力はせず、すつかり力を抜いて、柳に風、翻弄されるままになっている。そうすれば、かならず休息は与えられるものです。動物や植物は、この理屈を本能的に知っているのです。

力を抜くということは、文字どおり、筋肉と神経の緊張をゆるめ、体全体を放り出し、何かに凭りかからせ、休ませておくというやり方です。手脚をだらりと投げ出し、ぼかんと口をあげ、ぼかみtainな顔をしていれば、どんな人間でもたちまち眠れるといえます。

ストア派の人間のように、つねに雄々しく目ざめ、不動の岩のように、がっちり、勇を鼓して万事に耐えるという生き方も、むろん、それなりにりっぱな生き方にはちがいませんが、このエピクロス派の緊張緩和の方法も、それに劣らざりっぱな生き方だということを知らねばなりません。動物的ということは、けつして頭から軽蔑したものではないのです。

雨や風のような自然現象に対する場合はかりでなく、怒りとか、悲しみとか、嫉妬とかのような人間の感情に対しても、修練をつんだエピキュリアン（快樂主義者）は、自由に自分の態度や気分をリラックスすることができません。

「恋人に裏切られたんだから、おれが悲しみに沈んでいるとしても、べつにふしぎはないじゃないか。雨や風のように自然なことだよ。」と考えれば、失恋のためにくよくよ思い悩んでいる自分がばからしくなります。悲しみや嫉妬の感情に対しても、抵抗しようなどと思わないで、力を抜き、自分の気分に対して他人のように無関心になつてしまえばいい。「嫉妬の苦しみなんで、そんなに長くつづくもんじゃない。雨や風とおんなじだ。ほうつておけば、そのうちおさまるだろうさ。」と考えればよろしい。

人間の気分というものも、むずがって泣く子どもと同じで、相手にされなければ、しまいにはあきらめて泣きやんでしまうものなのです。あんまりかまひすぎると、いよいよつけあがつて、火がついたように泣きわめく。ほうつておけばよいのです。

みなさんのなかには、こうおっしゃるかたがいるかもしれない、「緊張を緩和して動物的に生きることと、熾烈な快樂をひたすら追い求めることとは、一見、矛盾するように見えるではないか。」と。

たしかに、それは正反對の生き方のように見えます。すこし比喩的でない方をすれば、前者は「快樂原則」の

まにまに、あっちへふらりと、こっちへふらりと、流されていく生き方、後者は、むしろ「快樂原則」のめざすところに、わき目もふらず突進する猪突猛進的な生き方、ということになるでしょう。ヨットとモーター・ボートの違いのようなものです。

しかし、目的とするところは、いずれの場合も同じであって、人間の本能、人間の欲望に忠実であるということです。

けちくさい形式的な道徳や、空虚な理想論などにまどわされず、すいすいと快樂の海を走っていく軽快な舟の姿を想像してください。古めかしい道徳は、暗礁です。こんなものに乗らなければ、たいへんだ。欲望という、美しい灯台の光だけを目標にしていればよい。

(澁澤龍彦『快樂主義の哲学』による)

問

(A) 線部(a)～(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(B) 空欄 に入る言葉として最も適当なものを本文中から漢字二字で抜き出して記せ。

(C) 線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 二つの哲学の目的は同じであるのに、そのための手段がまったく異なることが、弟子たちにはわからなかったから。

2 弟子たちの先生が打ちとけて会話をを行い、それによって異なる主義主張にも互いに耳を傾けて融和する術のあることを実践して見せた姿が驚きであったから。

3 弟子たちの先生の間で交わされる議論が、弟子たちには目まいを覚えさせるような、非常な難解さをたたえたものであったから。

4 エピクロス哲学とストア哲学が相通じるものであるのを示すために、弟子たちの先生がわざと演技をして

見せたその姿が意外だったから。

5 アタラクシアとはそもそも意見の一致を目指すべきものであるということ、弟子たちが理解できなかったから。

(D) 線部(2)について。この説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 死後の世界が恐ろしいために、道徳的に生きることが重要だと考えていた。
- 2 死が時間からの解放であることを認識することが、哲学の目的だと考えていた。
- 3 心の平静さを保つことで、死の恐怖を克服することができると考えていた。
- 4 死とは快楽そのものであるから、死についての思索を行うことが重要だと考えていた。
- 5 死とは時間の別の姿である、と認識することが重要であると考えていた。

(E) 線部(3)について。この状態の説明としては適当でないもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 動物的な状態に身をおくこと
- 2 勇を鼓して万事に耐えること
- 3 気分などというものは、ほうっておけばよいと考えること
- 4 欲望に忠実であること
- 5 道徳的に生きるように努めること

(F) 線部(4)について。筆者が「矛盾する」とは考えない理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 雨や風に無関係に生きようと努める動物の姿こそ、ストア派の理想像であるから。
- 2 外界に対する一種の緊張とその緩和とは、つねに表裏一体の行為であるから。
- 3 ストア派をヨット、エピクロス派をモーター・ボートに喩えるならば、両者は同じ目標に向かっており本

質的な違いはないから。

4 動物は自然と一致した存在であり、快樂のみを求める存在であるから。

5 「快樂原則」に従つておりさえすれば、どのような結果を招こうと関係はないから。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 一見相反する主張を掲げる二つの哲学は本質のところでは相通じているが、それは兩派の親分同士が意氣投合したこと起因する。

ロ 二つの哲学の目的は、自然に無理に対抗することによつても、あるいは自然に身をゆだねることによつても、ともに達成することができる。

ハ 死の脅威からの解放を目指すならば、抑制の効いた快樂に身をゆだねるのもひとつの方策である。

ニ 感情の流れのままに生きるならば、道徳的な生活を送ることは難しくなり、それはストア派の哲学の目的に沿わない。

ホ どのような手段を選ぶにせよ、快樂をひたすらに目指すことが、堅苦しく道徳的な生活を常に送るよりは重要である。

二 左の文章は、ソ連の日本人捕虜収容所での体験について書かれたものである。これを読んで後の設問に答えよ。
(解答はすべて解答用紙に書くこと)

柵の中はいわば一個の有機体⁽¹⁾であつて、生存に必要なあらゆる器官が備^{そな}つていたようだ。私たちは食堂で粟飯^{あわび}を食い、便所で排泄したが、この便所は巨大な穴だつた。この穴の上にはバラックが建てられ、その床板には幾つかの排泄孔が空いていたのである。こうして下の穴が徐々^{じょじょ}として一杯になつて来ると、その隣りにまた別の穴が掘られて、バラックはその上に移動した。ある時、私たちはこの穴を掘つていた。すると、そこへ見知らぬソ連軍将校が現われて言つた——(お前たちはこの穴が一杯になつたら帰るであらう)と、そして長い繩の先に石を結びつけて、穴の深さを計り、もつともつと掘りなさい、と言つて笑つた。私たちは穴が出来上つた時、一シヨベルの土をめいめい穴の中へ抛^なり入れて、これで帰る日が一日早くなつたと言つて笑つた。

食堂と便所とそしてその他にいろんな建物がそこにあつた。理髪所、浴場、医務室、水槽、食糧庫、被服庫、とにかく何でもあつた。そして私たちが外部へ出て働く限り、食糧と水と火は門から入つて来たのである。そして、スターリン憲法の太陽のもとで、この労働の権利は私たちにいくらでも与えられた。

これらの建物にはみなそれぞれそのロシヤ名が貼付されていた。食堂にはスタローヴァヤ、便所にはウポールナヤという具合に。そして時々私たちの生活ぶりを検査に来た、いかめしい制服の人たちは、先^まず建物の名前を読んで、果してそれがその名に値^{あた}いするかどうか見るために、その中へ入つて行つたのである。

彼らは大抵^{たいてい}モスクワから来たと言われた。モスクワの決定、モスクワの命令が行われているかどうかを見るために、彼らは直ぐ隣の町から来た時でも、モスクワから来たと言われたのである。

或る時、こう言う検察官の一行がやつて来て、柵の中を見て廻つたが、彼らはその時、一隅に立っている、一軒の、それは小さい小屋を発見した。それには名前がなかつた。「あれは何か?」と彼らの一人が言つた。

「あれは死人のための家です」

彼らはうなずいて、そこには入らないで、そのまま通り過ぎた。

私たちはこの小屋にロシア名を付けようとして、いろいろ考えたのだった。しかし、結局、何と書いていいか解らなかつた。私たちはモルグという言葉を知っていたが、この名をここに付ける気がしなかつた。これは行き倒れなどの死体置場のことだし、一方私たちは、まだ（英霊安置所）と、日本語でその小屋を呼んでいたのだった。

その頃、パウロフという退職した老炭坑夫がいて、彼は私たちに炭坑危害予防の規則を教えに毎日やって来た。彼は猫背で丈の高い老人で、部厚な本を小脇に抱えて、大跨おおまたにゆっくり歩いて来て、私たちをまるで小学生のよう(3)に取扱ひ、判り切つたことをくどくどと説明した。私たちは盛んに居眠りした。彼は怒らなかつた、そして帰る時に——「ここでは居眠りしてもいいけれど、炭坑の中で眠つてはいけません」と言った。

このパウロフ爺じいさんに、私たちは例の名無し小屋を示して、それをロシア語で何と呼んだらよいか聞いてみた。彼は答えた。

「チャソーフニヤ」と。

私たちは彼が帰つてしまつてから字引を引いてみた。するとチャソーフニヤというのは小さい礼拝堂という意味(3)だったのである。私たちはそれ以上深く穿鑿せんさくしなかつた。そしてパウロフ爺さんの言つたまま(4)麗麗しく（チャソーフニヤ）と書いて、その小屋の入口の上に掲げておいた。

大部日数が経つてから、また別の検察官がやって来た。彼らはあらゆる検察官のように、とんでもない一隅を指で触つてみて、眉をしかめた。彼らは私たちの宿舎に入つて来て、まるで動物の匂いでも嗅かぐように鼻をうごめかした。そうして最後に、あの小屋の前を通りかかつて、（チャソーフニヤ）と声を出して呼んだが、しかし小首をかしげたまま、中には入らないでそのまま通り過ぎた。

私たちの収容所に発疹はつじんチフスがはやつたことがあつた。このことを私たちは後になつてから、あたかも古い物

語のように話し合ったものである。その頃は、まだ来たばかりで、生活が確立していなかった。その頃は、まだ有史以前で、生と死とがあんまりはつきりしていなかった。私たちのいる所が、そのまま死体置場となっていて、まだあの小さい死体置場は出来ていなかった。私たちは平均一日一人は死んだ。私たちは墓穴を掘る一方、唯一の防衛戦として、さかんに虱しらみをつぶした。殺人者の細菌は虱に寄生し、虱は人間に寄生し、この人間は頼りがなかつた。人間が死ぬと、虱はそれを見捨てて、生きている人間の方へやって来た。私たちは虱にかこまれ、そう言う同居者と一緒に住んでいたわけである。

「虱はお前たちが持つて来たものだ」とソ連の軍医が言った。が、虱を誰が持つて来ようと、死は私たちがめいめい持つていることだけは確かだつた。

「今度は俺の番だ」と私たちは言った。実際、未知の順番に従つて私たちは次々と死んだ。

私たちは滅菌所を作つて、そこで虱を火あぶりにして大量に殺戮ころりくした。こうして私たちは少しずつ勝利し、だんだん死なくなつた。それはあたかも篩ふるいにかけられたようなもので、その網目からは体の大小とは関係なく未知の尺度に従い、多くの人々が篩ふるいい落されてしまつた。発疹チフスは遠ざかつた。私たちは生きて残つたが、それから当分の間、私たちは人員と共に虱の数を報告したものである。

「第三宿舍総員六十五名、虱一匹」と言う具合に。

そして、この虱一匹というのは、虱を一匹つぶしたと言ふだけのことだつた。私たちは大いに沢山たくさんの虱をつぶそうとしたが、一匹も見つかからないことがあつた。すると私たちはどこかに誰かが虱を持つており、それが或いは自分かもしれないと感じた。このように私たちは当分びくびくしてゐた。

だが私(5)たちは死を少しずつ距離を置いて考えるようになり、だんだんと生活の秩序が確立されていつた。未知の原始林は、だんだんと人の住めるように整備されて来た。そして、その時、私たちは死体置場と言ふものを特別に作つたのである。それは最も遠隔な片隅に建てられ、非常に小さいもので（おお！ 最小限に）、中には木の寝台が一つ据えられ、定員は一名だつた。ある大工がこの寝台を作つたのだが、彼はそれを作つてから、それが

死人用のものであることを知ったのだった。すると彼は、粗末な板が乱暴に張られたその床を押さえながら、まるで弁解のように、「ここに蓆しゅうを敷いたら、そう悪くはない」と言った。さて、それは小屋の中に据えられたが、⁽⁶⁾それに寝る人はなかなか出て来なかった。

ゆるやかな斜面の大きな岡が二つ向い合つて立っていて、その片方の中腹には私たちの収容所があり、丁度その向いには炭坑があつた。収容所の建物は土の中に半分もぐり込んでいて、それは向いの炭坑から見ると、草地の中に柵で囲われた家畜小屋のように見えた。そして私たちの所から炭坑を見ると、それは岡の中腹に穿うがられた小さい穴で、そこからは何か昆虫の営みのように、毎日休むことなくトロッコが出て来ては、石炭を貯炭場へぶちまけるのが、小さく眺められた。そしてこの岡と岡の窪地に沿うて一筋の道路が通つていた。これを下つてゆくと小さい町へ行くことを私たちは知つていたが、それを上つてゆくと、どこへ行くのか私たちは知らなかつた。それから炭坑と収容所を結ぶ小路があり、これは私たちの足跡で出来た、踏まれた草の路で、炭坑の交代時の前後には、列を作つた一群の人がその上に現われて、或いは炭坑の方へ、或いは収容所の方へ歩いてゆくのが見えたが、それが私たちだつた。

収容所は概して静かなものだつた。その話声は宿舎から外へ洩もれなかつたし、歌声となると、宿舎の中でも、たまにしか聞かれなかつた。殊ととに夜ともなると私たちの静寂は大きかつた。そして、たまたま私たちは戸外へ出て、夜の中で、向いの岡の方から歌声が響いて来るのを聞いた。暗黒の中で、それは岡が歌つていふように思われ、私たちはじつと耳傾けた。それは女性の声で、二部か三部の合唱だつた。それに実に生命そのものように思われた。それは高々と鳴り響き、私たちの岡に傾聴(7)する静寂を作り出した。歌声は一人の口から突然起つて来たかと思つと、直ぐそれに新たな声次々に加わつた。その起つて来たと同じように、また突然やんでしまふのだつた。そして、その後の静寂に耳傾けていると、微かかにトロッコの音が聞こえ、また石炭を町の方へ運んでゆく電車の音が、ぼんやり聞えた。

(注) 1 スターリン憲法——一九三六年に採択されたソ連の憲法。

問

(A) ——線部(1)について。ここで筆者は收容所を「一個の有機体」にたとえているが、本文中の他の箇所では別のものにもたとえている。それを本文中から五字以内で抜き出して記せ。ただし、句読点は含まない。

(B) ——線部(2)について。なぜ「笑った」のか。その説明として最も適当なものを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 穴に少しだけ土を戻すなど、ほとんど効果のない方法でしか「私たち」が抵抗を示せなかったから。
- 2 理不尽な命令と理解しつつも、「私たち」がいかに日本人らしく生真面目に穴を掘っていたから。
- 3 帰国を早めるために本当に排泄物で穴を一杯にしかねない「私たち」のしぶとさに呆あきれていたから。
- 4 「私たち」が穴を深く掘れば掘るほど、皮肉にも「私たち」の帰国の日は遠のくことになるから。
- 5 帰国が遅くなるだけの無意味な単純作業をさせていることを「私たち」にほめかしたかったから。

(C) ——線部(3)について。「私たち」はなぜ「それ以上深く穿鑿しなかった」のか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 「小さい礼拝堂」という意味が、無念にも倒れた仲間たちに対して「私たち」が感じていた罪の意識を和らげてくれたから。

2 「小さい礼拝堂」という意味が、一人一人の死者を人間らしく吊りたいと願う「私たち」の気持ちにふさわしく感じられたから。

3 「小さい礼拝堂」という意味に、死者のための建物を作るのは文化や言語の違いを越えて共通する宗教的な行為だと納得したから。

4 ロシヤ語を母語とし、しかも寛大な教師のような態度で「私たち」に接するパウロフ爺さんの言うことを疑う理由はなかったから。

5 「小さい礼拝堂」という意味を知って、死者に囲まれて生活する「私たち」の内に発した感情が信仰心だと気づいたから。

(D) 線部(4)について。「麗麗しく」の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 目につくように 2 うやうやしく 3 美しく

4 流れるように 5 ていねいに

(E) 線部(5)について。これとは対照的に、収容所内に「生活の秩序」が確立されていなかった時期のことを、筆者はどのように形容しているか。それを本文中から五字以内で抜き出して記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) 線部(6)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 その小屋の中にある寝台に寝ることは、みずからの間近な死を認めるのも同じことだから。

2 その小屋はあまりにも不便な場所にあつたため、死者が運び込まれることがなかったから。

3 その小屋が建てられた頃には発疹チフスも終息し、あまり死者が出なくなっていたから。

4 つねに多数いた死者のうちから、一人だけを選び寝台に寝かせることができなかつたから。

5 粗末な板が張られただけの寝台に蓆を敷いても寝心地はたいしてよくならなかつたから。

(G) 線部(7)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 鳴り響く歌声が「私たち」のかすかな物音までかき消すということ。

2 一方の岡から響く歌声を他方の岡が聞かなければならないということ。

3 収容所に広がる澄み切った沈黙は耳を傾けるに値するということ。

4 「私たち」の静けさが生命そのものの歌声を際立たせるということ。

5 歌声を聞くことに没頭して「私たち」が静まり返っているということ。

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 収容所では食堂や便所など、まず人間の生存に必要な施設から建てられるため、死体置場の設置は後回しにされることになった。

ロ 「私たち」は死体置場に「小さい礼拝堂」という意味のロシヤ名を与えることで、建物の検査をする検察官を当惑させることに成功した。

ハ 死の細菌を運ぶ虱は必ず生者に寄生するのだから、収容所で生きる「私たち」の誰もがつねに等しく死の脅威にさらされていた。

ニ 「私たち」の生活圏は、柵に囲まれた収容所と、向かいの岡の中腹にある炭坑という二つの場所にもっぱら限定されたものであった。

ホ 夜になると向こうの岡から聞こえてくる歌声は、静寂に包まれた収容所が死の世界にほかならないのだと「私たち」に痛感させた。

三 左の文章は『戴恩記』の一節で、著者松永貞徳が、十六世紀末に連歌界の第一人者であつた紹巴について記した場面である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

紹巴法橋は、奈良の住人たりしが、「人は三十歳のうちに名を発せざれば、立身ならぬ物なり。つくづく、世の有様を見るに、連歌師はやすき道と見えて、職人町人も貴人の御座に連なれり。もしそれをえせずは、百万遍の長老の拳状をとりて、関東へ下り、大岩寺にて談義をときならひ、世を渡るべし」と、ただ両道に定め上洛し、昌叱の父里村昌休をたのみ、連歌稽古せられしに、度々退屈しては、袋を打ちかたげ「関東へ下らん」といふを、小川の連歌師どもおしとめ、かなたこなたとせしほどに、やうやう人に知られ、称名院殿に源氏物語を聞き、三吉殿の仰せにて宗養と両吟を仕り、辛勞の功つもりて冥加やありけん、その内に宗養も失せ、天下の上手とよばれ給ひし。古今は近衛殿より御相伝あり。

称名院殿は、総別人をえらみて道を伝へ給ふ。ある時、能登国より、伊藤といふ者、古今を望みけれども、御承引なかりしに、御家司「何とてさやうに仰せらるるぞ。はや御台所、糧たえて難義に及ぶ」と申せしかども、「いやとよ。一日来るを、透垣より御覧あれば、俗人の身ながら、掛絡をかけて参りし。かやうの振舞する者は、心持ちよからぬ者なり」とて、つひに御ゆるしなかりしと、幽法公御物語なされしなり。

又、この紹巴法橋語り句おほき人にて、あしくいふ事もあれども、さすが古人にて、殊勝の心持ち給へり。ある時、丸に語られしは、「われこの歳になれども、寝むしるを人に任せず。貧しかりし時を忘れざる故なり。称名院殿御忌日に御墓へ参らぬ事なし。御恩を忘れぬ故なり」。丸をはじめ、今ごろの者に、身栄え年老いて、さやうに師の [] を重んずる事あらんや。この人失せられしと告げ来りし時、幽法公聞こし召して、深く惜しませ給ふほどに、「紹巴は歌学などさまでなかりし人と世に申すに、何とてさほどには御惜しみあるぞ」と申し上げければ、「いさとよ、称名院殿といふ人、世におはせぬなり」と仰せられし。もつともこれ金言ならずや。

(注) 1 百万遍の長老の挙状——京都の知恩寺の長老の推薦状。

2 談義——大衆に向けて僧が説法すること。その専門家を談義僧という。

3 称名院殿——三条西公条。歌人、古典学者。当代一の源氏物語学者であった。

4 三吉殿——三好長慶のこと。武将であり、連歌師たちの有力な庇護者であった。

5 宗養と両吟を仕り——宗養は当時、連歌界の第一人者であった連歌師。両吟は二人だけで連歌を行うこと。

6 古今——古今伝授のこと。当時、『古今和歌集』に関する秘事・口伝が師から弟子へと受け継がれていた。

7 総別——およそ。だいたい。

8 御家司——ここでは、三条西家の事務を司っていた職員のこと。

9 掛絡——略式の袈裟。

10 幽法公——この時期を代表する武家文化人であった細川幽斎のこと。著者貞徳の師であった。

11 語り句おほき人——しばしば人の噂にのぼる人。

12 丸——著者松永貞徳のこと。

13 寝むしろ——寝具。ここでは、蒲団の上げ下ろしのこと。

問

(A) ——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 表現を工夫しやすい

2 奥義を究めやすい

3 身分に左右されやすい

4 名声を手にしやすい

5 交際を続けやすい

(B) ——線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 貴人と同席する夢が叶わなかったら
- 2 連歌にたずさわる気がなくなったら
- 3 連歌師になることができなかったら
- 4 この上ない評判を得られなかったら
- 5 連歌師の世界にいられなくなったら

(C) 線部(3)の解釈として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 連歌師と談義僧のどちらかとして生きていくのだと決意して
- 2 連歌と談義の二つの技能を身につけるのだと覚悟を決めて
- 3 立身出世するには容易な道と困難な道とがあることを見定めて
- 4 京都と関東のどちらかで生きていくだろうと想定して
- 5 三十歳が立身できるかできないかの分かれ目だと自覚して

(D) 線部(4)の意味として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 たまたま
- 2 ようやく
- 3 ただちに
- 4 しだいに
- 5 ますます

(E) 線部(5)が指し示す内容として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自分の力では奥義を正しく伝えられないということ
- 2 都人でなければ秘事を伝授しないということ
- 3 伊藤には古今伝授をしないということ
- 4 古今伝授は近衛殿から受ければよいということ
- 5 自分の家の経済状態など気にしないということ

(F) 線部(6)の現代語訳を六字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(G) 線部(7)は誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なものを一つを選び、番号で答えよ。

- 1 紹巴
- 2 伊藤
- 3 近衛殿
- 4 称名院殿
- 5 御家司

(H) 線部(8)の解釈として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 3 称名院殿の墓地を管理する人がいなくなるから
- 4 称名院殿に遠慮して紹巴を支援できなかつたから
- 5 称名院殿の後を継ぐ人が一人もいなくなるから

【以下余白】